

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520574

研究課題名(和文) 仮定法節と不定詞節の比較による定形性の研究

研究課題名(英文) Studies on Finiteness by Comparing Subjunctive Clauses with Infinitival Clauses

研究代表者

野村 忠央 (Nomura, Tadao)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00366957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、仮定法節と不定詞節の二つの構文を扱い、両者に存在する類似性と相違性がどのような統語的メカニズムにより生じるかを明らかにすることを研究目的とした。

まず、両者の共通性として、両方の節には透明性の効果が観察される。しかし、相違性として、仮定法節は定形節であるが、不定詞節は非定形節であると考えられている。このため、定形節は不透明になるという従来の考えは妥当ではない。結論として、本研究では、仮定法節と不定詞節を観察することにより、従来の考えでは捉えることができなかった、節の定形性と透明性の効果の関係を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： In this research, we have discussed subjunctive clauses and infinitive clauses. The main purpose of this study was to show what kind of syntactic mechanisms cause similarities and differences between subjunctive clauses and infinitive clauses.

It has been assumed that the transparency effect is observed both in subjunctive and infinitival clauses, but that subjunctive clauses are finite while infinitive clauses are nonfinite. Thus, the traditional idea that finite clauses are opaque is not appropriate. In conclusion, we have shown in this study how the transparency effect connects with the finiteness of clauses from the current accepted point of view, by observing various kinds of phenomena in subjunctive clauses and infinitive clauses.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：仮定法節 不定詞節 定形性 透明性 英語学 生成文法 通言語的比較

1. 研究開始当初の背景

従来の文法理論では、概ね、次の通りに考えられてきた。

非定形節 = 透明性の効果を示す

定形節 = 透明性の効果を示さない

しかし、仮定法節と不定詞節を観察すると、この考えは適切ではないと考えられる。このことを明確にするために、両節の類似性と相違性を以下に述べる。

(1) 類似性：透明性の効果 (transparency effect)

本研究が取り上げる類似性として、透明性の効果が挙げられる。仮定法節は *wh* 島 (*wh*-island) を形成しない。そのため、別の *wh* 句を仮定法節の内部から抜き出すことが可能である。また、仮定法節内部に存在する普遍数量詞 (universal quantifier) は節外の作用域を取ることが可能である。さらに、ロマンス語系の言語においては、疎遠の効果 (obviation effect) が見られ、仮定法節内に存在する代名詞は主節内の名詞句と同一指示 (co-reference) になることができない。これらの例はいずれも、仮定法節の透明性の効果を示している。同様に、不定詞節も *wh* 島を形成せず、さらに、普遍数量詞は節外での作用域が可能となる。不定詞節に関しては、他にも接辞繰り上げ (clitic-climbing) 等の顕在的な移動現象においても、透明性の効果を示す。

本研究は特に、透明性の効果に着目するが、これ以外にも類似性として、以下の3点を挙げることができる。第1に、不定詞節の代わりに仮定法節を用いる言語がある (スラブ語族)。第2に、命令文には、当該言語の仮定法節もしくは、不定詞節 (コントロール構文の補部節) が使われるという一般化が存在する。最後に第3として、意味論的観点においても、

仮定法節・不定詞節は非現実 (irrealis) を意味することが多い。

(2) 相違性：定形性

仮定法節は定形節であるが、不定詞節は非定形節である

本研究が取り上げる第1の相違点として、両節の定形性に関する違いが存在する。定形節は「数や人称、時制や法により動詞が屈折する節」だと考えられる。この定義に従うと、仮定法節では、直説法とは異なる屈折がみられることから定形節であると考えられる。一方、不定詞は動詞の屈折を示さないため、非定形節だということになる。

仮定法節は顕在的な主語を許すが、不定詞節は許さない

第2の相違点として、顕在的な主語を許すかどうか挙げられる。仮定法節では顕在的な主語が生起できるが、不定詞節では生起しない。意味論や論理学では、顕在的な主語と述部が存在すれば定形節だと定義される。この定義に従えば、仮定法節は定形節となり、一方、不定詞節は非定形節となる。

以上のように、仮定法節と不定詞節は共に、透明性の効果を示すにも拘らず、定形性に関しては異なると考えられている。このため、本研究では、仮定法節と不定詞節の観察を通し、節の定形性と透明性の効果に関する統語的メカニズムの解明を試みた。

2. 研究の目的

以下の3点を本研究の目的とした。

(1) 仮定法節と不定詞節の類似性と相違性を統語的に捉える理論を提示する

第1に、仮定法節と不定詞節の類似性 (特に、透明性の効果) と相違性 (定形性) を捉える統語理論を提示する。本研究の予備研究として、研究代表者は仮定法節に関しての研究を書

籍としてまとめ、世に問うている(Nomura (2006))。また、不定詞節に関しては、研究分担者がまとめ、博士論文として提出している(Kanno (2010))。このため、仮定法節と不定詞節に存在する記述の一般化及び、従来の理論では捉えられなかった問題は把握している。この一般化と問題点を十分考慮し、極小主義の枠組みの下、理論を形成する。

(2)通言語学的な視点・通構文的な視点から研究を進める

第2に、形成された理論が(i)通言語学的に妥当であるか、(ii)他の構文にも応用できるかを検証し、その結果を提示する。通言語学的な視点として、特に、ロマンス語族、スラブ語族、日本語、韓国語を扱う。次に、通構文的な視点とし、命令文、法助動詞(may, can, must 等)を含む平叙文を扱う。このような通言語学的・通構文的な検証をし、理論が説明できる現象と説明できない現象を明らかにし、提示する。

(3)提示された理論から導き出される予測を検証する

提示される定形性(finiteness)と透明性の効果(transparency effect)に関わる理論が、どのような理論的予測を導き出すかを十分に検討し、その予測が適切であるかを検証する。

3. 研究の方法

本研究においては、以下の3つの方法を通して研究を行った。第1に、仮定法節及び不定詞節に関する統語的メカニズムを提示する。第2に、(i)通言語学的に妥当であるか、(ii)他の構文にも応用できるかを検証する。第3に、極小主義全体からみた場合の理論の位置付けを検証することである。

(1)統語的メカニズムの理論の提示

研究代表者と研究分担者が持っている資料を整理した後、直ちに、仮定法節と不定詞節に関する一般化を提示する。この両方の節に適切な一般化の形成は、研究代表者と研究分担の2人で進める。さらに、この一般化を踏まえ、極小主義の枠組みの下、理論形成を行う。この理論形成は研究代表者により進められ、研究分担者は補助的に検証の役目を負う。以上、形成された理論を学会で発表した後、論文としてまとめ、提出する。

(2)通言語学的視点・通構文的視点

上記(1)で形成した理論が(i)通言語学的に妥当であるか、(ii)他の構文にも応用できるかを検証する。この作業を通して、理論の発展と修正を行う。まず、通言語学的にも妥当であるかどうかを検証するため、(i)日本語・韓国語、(ii)ロマンス語族、(iii)スラブ語族を観察する。これらの言語の仮定法節と不定詞節は比較的研究が進んでいるため、理論の妥当性を検証するために適切な言語だと考えられる。次に、形成された理論が他の構文にも応用可能であるかを検証する。ここでは、命令文、法助動詞(may, can, must など)を含む平叙文等の様々な構文に応用できるかを検証する。

以上のように、通言語学視点・通構文的視点から得られた結果を発表し、論文としてまとめ提示する。

(3)極小主義全体からみた場合の理論の位置付け

最後に、現行の生成文法理論である極小主義の枠組みにおいて、形成された理論がどのような影響を与えるかを検証し、必要とされるべき、極小主義理論の問題点を提示し、その解決法を明らかにする。特に、CP フェイズ(位相)の観点から考察を進める。現在の極小主義においては、節の定形性はCP フェイズと関係すると考えられている。このため、

本研究が CP フェイズの概念に対し、どのような理論的貢献が可能であるかを調べ、その結果を提示する。

4. 研究成果

以下の3点を研究成果として挙げておきたい。

(1) 節の定形性と透明性の効果に関する新たな知見

従来、透明性の効果は非定形節において観察されると考えられてきた。しかし、仮定法と不定詞節を観察するとこの考えは誤っていることを示すことができた。

(2) CP フェイズに対する貢献

現在の極小主義において、節の透明性は CP フェイズ(位相)の特徴に還元されている。これを踏まえ、透明性の効果と定形性の関係の解明を試みる本研究によって、CP フェイズに対する何らかの理論的貢献が果たせたと考えられる。

(3) 実際の記述的な現象を基盤とした理論の構築

極小主義に基づく統語論は理論が中心となる傾向がある。しかし、仮定法と不定詞節に関しては、生成文法初期から研究が続けられており、また、伝統文法などを含む生成文法以外の理論でも多く研究されている構文であるため、言語学的資料も多く、様々な現象が観察されてきた。

以上を踏まえ、本研究では、英語及びその他の言語の経験事実(実際のデータ)を重視し、統語的メカニズムに関する理論を柔軟に修正しつつ研究を進めた。結果として、言語理論と経験事実のバランスの取れた仮説を提示することができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

野村 忠央、「日本の英語学界 現状、課題、未来」、『日本英語英文学』、査読有、No. 23、2013、pp. 55-85

KANNO, Satoru, "Review: Spell-Out and the Minimalist Program by Uriagereka" *English Linguistics*, 査読有、Vol. 30, No. 2, 2013, pp. 729-739

菅野 悟、「コピー操作を伴う連続的素性継承」、『北海道教育大学紀要・人文科学編』、査読無、64巻1号、2013、pp. 77-92

野村 忠央、「法助動詞単義分析再考 根源的用法と認識的用法」、『日本英語英文学』、査読有、No. 22、2012、35-51

KANNO, Satoru and Tadao NOMURA, "Syntactic Finiteness of Subjunctive Clauses" *Studies in English Linguistics and Literature*, No. 22, 2012, pp. 67-91

菅野 悟・野村 忠央、「極小主義における統語的定形性」、『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』、査読無、63巻1号、2012、pp. 87-102

菅野 悟、「機能範疇の出現と消失: 言語獲得、類型論、歴史言語学に対する極小主義のアプローチ」、『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』、査読無、62巻1号、2011、pp. 47-62

[学会発表](計16件)

菅野 悟、「A Note on Case-Assignment」北海道理論言語学研究会、2014年3月8日、旭川医科大学

野村 忠央、「法助動詞否定の句構造と普遍性について」、日本英語英文学会第1回北海道支部大会、2013年8月17日、北海道教育大学旭川校

菅野 悟、「言語の変化と言語外の要因」、日本英語英文学会第1回北海道支部大会、2013年8月17日、北海道教育大学旭川校

野村 忠央、「最近の極小理論批判」、北海道理論言語学研究会第 5 回大会、2013 年 3 月 8 日、北海道教育大学旭川校

野村 忠央、「非定形節の主語について」、日本英語英文学会第 23 回年次大会シンポジウム「非定形節の諸問題」講師、2013 年 3 月 2 日、東京家政大学

菅野 悟、「to 不定詞の時制解釈」、日本英語英文学会第 23 回年次大会シンポジウム「非定形節の諸問題」講師、2013 年 3 月 2 日、東京家政大学

野村 忠央、「法助動詞単義分析再考」、北海道理論言語学研究会第 4 回大会、2012 年 8 月 8 日、北海道教育大学旭川校

菅野 悟、「Derivational Cycle in the Minimalist Program」北海道理論言語学研究会第 4 回大会、2012 年 8 月 8 日、北海道教育大学旭川校

菅野 悟、「機能範疇の認可：通時と類型の観点」、北海道理論言語学研究会第 3 回大会、2012 年 3 月 7 日、旭川医科大学

野村 忠央、「動詞 beware に基づく仮定法現在節・命令文の構造」、日本英語英文学会第 18 回年次大会、2012 年 3 月 3 日、亜細亜大学

菅野 悟・野村忠央、「定形性の諸問題」、北海道理論言語学研究会第 2 回大会、2011 年 12 月 18 日、北海道教育大学旭川校

菅野 悟・北田伸一、「能格性と項構造」、北海道理論言語学研究会第 2 回大会、2011 年 12 月 17 日、北海道教育大学旭川校

野村 忠央、「不定詞節における VP 削除について」、北海道理論言語学研究会第 2 回大会、2011 年 12 月 18 日、北海道教育大学旭川校

野村 忠央、「本当に 2 種類の to が存在するのか？ 制御タイプの to と繰り上げタイプの to」、日本言語学会第 143 回大会、2011 年 11 月 26 日、大阪大学豊中キャンパス

菅野 悟、「機能範疇と言語変化 極小主

義の観点から」、日本英文学会北海道支部第 56 回大会シンポジウム講師、2011 年 10 月 2 日、札幌学院大学

菅野 悟、「言語構造の通時変化とその理論的意義」、北海道理論言語学研究会第 1 回大会、2011 年 8 月 13 日、北見工業大学

〔図書〕(計 2 件)

江頭 浩樹・北原 久嗣・中澤 和夫・野村 忠央・大石 正幸・西前 明・鈴木 泉子編、開拓社、『外池滋生教授退職記念論文集』、2015(刊行予定)、総ページ数未定

野村 忠央・菅野 悟・野村 美由紀・外池 滋生、DTP 出版、『英文法の総復習とワンクラス上の英作文』、2014、224

6 . 研究組織

(1)研究代表者

野村 忠央 (NOMURA, Tadao)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：00366957

(2)研究分担者

菅野 悟 (KANNO, Satoru)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80583476